公益社団法人 全国大学体育連合
Japanese Association of University Physical Education and Sports

The 2nd Forum of The University Physical Education and Sports Studies, 2014

第2回大学体育研究フォーラム

会期：2014年2月27日（木）・28日（金）

会場：武蔵野美術大学鷹の台キャンパス

武蔵野美術大学
Musashino Art University

1. 大会日程

期 日 ：2014 年 2 月 27 日（木），28 日（金）

会 場 ：武蔵野美術大学鷹の台キャンパス（東京都小平市小川町 1-736）

2 月 27 日（木）

時　間	プログラム	場　所
13:00～13:30	**受付**	体育館 103 教室
13:30～13:50	**開会式**	体育館 104 教室
14:00～14:20	**調査報告：「運動部活動実態調査」** 演者：北徹朗（武蔵野美術大学） 座長：高橋宗良（杏林大学）	体育館 104 教室
14:25～15:55	**研究報告：1 演題 15 分（質疑応答含む）** No. 1～3 座長：西脇雅人（大阪工業大学） No. 4～6 座長：中山正剛（別府大学短期大学部）	体育館 104 教室
16:05～17:50	**事例報告：1 演題 15 分（質疑応答含む）** No. 1～4 座長：佐々木敏（北星学園大学） No. 5～7 座長：服部由季夫（星槎大学）	体育館 104 教室
18:00～18:35	**ポスター発表：1 演題 5 分（質疑応答含む）** No. 1～4 座長：角南良幸（福岡女学院大学） No. 5～7 座長：橋口剛夫（帝京科学大学）	12 号館 8F MAU
18:40～20:30	**情報交換会**	12 号館 8F MAU

2 月 28 日（金）

時　間	プログラム	場　所
9:30～10:00	**受付**	体育館 103 教室
10:00～12:00	**ワークショップ** 「iPad を大学体育実技で使ってみよう」 田原亮二（名桜大学）	剣道場
12:00～13:30	**昼食**	
13:30～14:30	**ラウンドテーブル**	
	RT1：教育・スポーツ施策 ≪企画者≫丸井一誠（精華女子短期大学），中島寿宏（北海道工業大学）	剣道場
	RT2：ICT 利用授業開発 ≪企画者≫北徹朗（武蔵野美術大学），安部久貴（東京工科大学）髙橋宗良（杏林大学），橋口剛夫（帝京科学大学），田原亮二（名桜大学），岡田光弘（国際基督教大学），小林勝法（文教大学）	体育館 104 教室
	RT3：オリンピック・パラリンピック ≪企画者≫師岡文男（上智大学）	身体運動文化実験室
	RT4：キャリア開発 ≪企画者≫奈良雅之（目白大学）	体育館 103 教室
	RT5：運動部活動指導 ≪企画者≫髙橋宗良（杏林大学），小林勝法（文教大学），北徹朗(武蔵野美術大学)，中山正剛（別府大学短期大学部）	柔道場
14:30～14:45	**閉会式**	体育館 104 教室

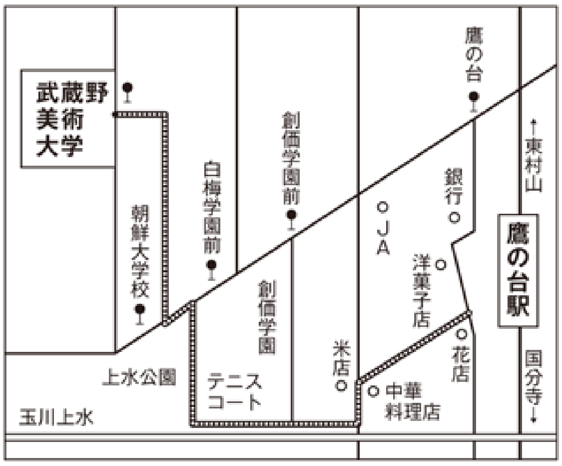
2. 会場への交通案内

【武蔵野美術大学鷹の台キャンパスへのアクセス】

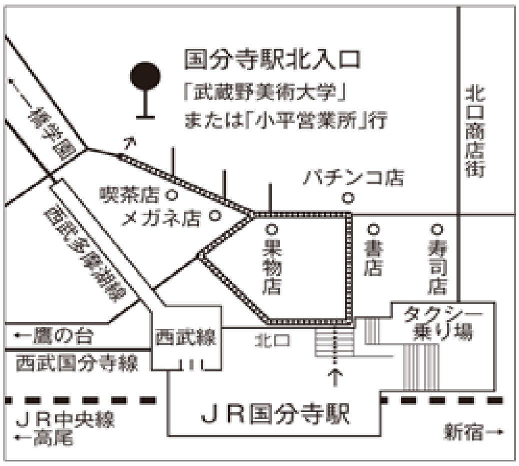
a.　西武国分寺線：「鷹の台駅」下車，徒歩約 20 分

b.　J R　中　央　線：JR「国分寺駅」北口よりバス「武蔵野美術大学行き」約 15 分

a.



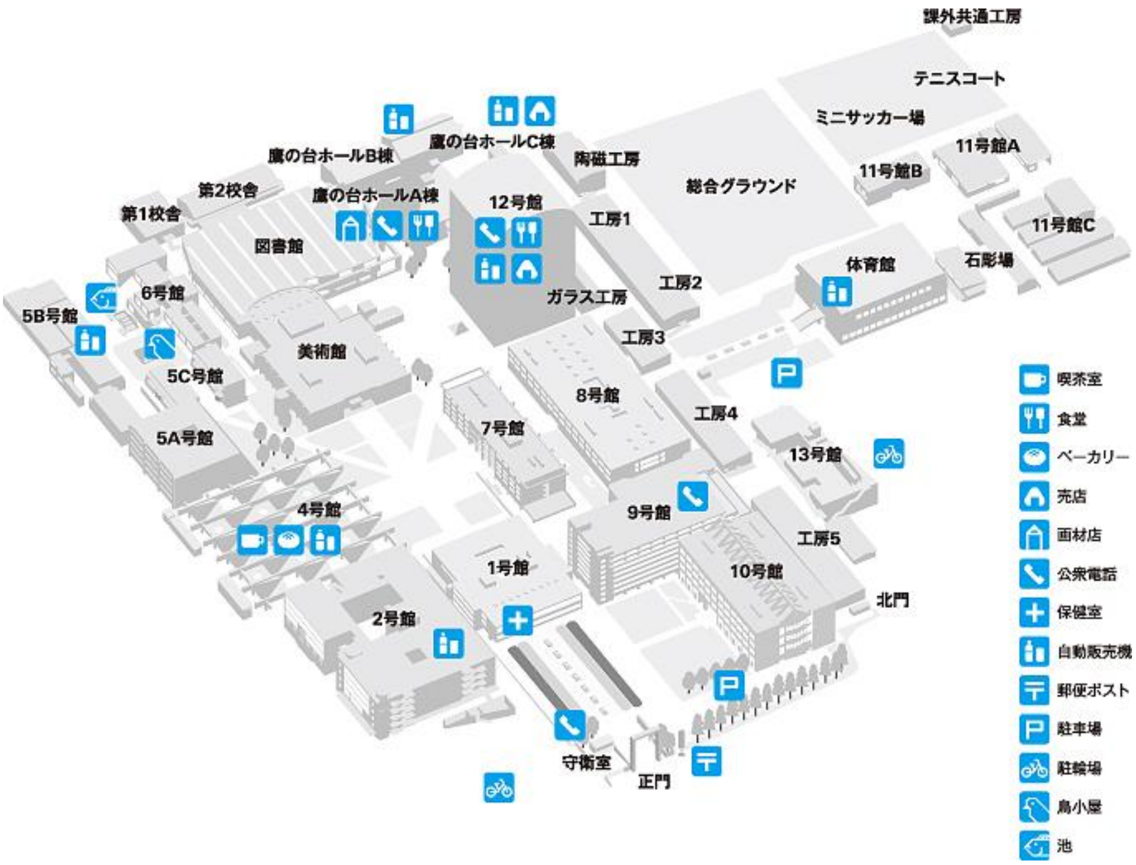
b.



住所：〒187-8505 東京都小平市小川町 1-736　武蔵野美術大学

3. 会場案内

【武蔵野美術大学案内図】



【主な使用会場】

受　　　付：体育館 103 教室

開　会　式：体育館 104 教室

調 査 報 告：体育館 104 教室

口 頭 発 表：体育館 104 教室

ポスター発表：12 号館 8F MAU

情 報 交 換 会：12 号館 8F MAU

ワークショップ：剣道場

ラウンドテーブル：RT1「教育・スポーツ施策」（剣道場），RT2「ICT 利用授業開発」（体育館 104 教室），RT3「オリンピック・パラリンピック」（身体運動文化実験室），RT4「キャリア開発」（体育館 103 教室），RT5「運動部活動指導」（柔道場）

4. 参加者へのお知らせ

〇受付

受付につきましては，体育館 103 教室に設けます（2 日目の午前中まで設置）．受付の際，参加費をご準備の上，事前申し込みがお済みの方は，「事前申込者」受付にてネームカードをお受け取り下さい．事前の申し込みがお済みでない方は，「当日受付」にてネームカードをお受け取り下さい．

〇ネームカード

氏名及び所属をご記入の上，フォーラム期間中は会場にて必ず着用してください．

〇参加費及び情報交換会参加費

参加費は以下のようになっております．また，情報交換会参加費は 3,000 円となっております．

大体連会員：（～2/1 の申し込み）2,000 円，（2/2～の申し込み）3,000 円

大体連非会員：（～2/1 の申し込み）3,000 円，（2/2～の申し込み）4,000 円

大 学 院 生：（～2/1 の申し込み）1,000 円，（2/2～の申し込み）2,000 円

〇情報交換会

情報交換会は，12 号館 8F MAU にて行います．当日の申し込みも可能ですので，沢山のご参加をお待ちしております．

5. 発表者へのお知らせ

口頭発表者（研究報告・事例報告）

1. 1演題につき，**発表12分，質疑応答3分の計15分間**です。**10分，12分，15分**に合図をします。発表時間の厳守をお願いいたします。
2. 抄録集の他に配布資料が必要な方は**80部**ご用意ください。
3. パソコンは事務局で用意しますので，発表データをコピーし，**発表前**（**研究報告の方は，14 : 10** までに，**事例報告の方は15 : 50** まで）**に動作確認**を行ってください。
4. 学会終了時にデータは責任を持って消去いたします。発表と発表の間の時間があまりございませんので，別のパソコンのご使用はできる限り避けていただきたいと思います。都合上，どうしてもご自身のパソコンを使用されたい方は事前にお申し出ください。
5. パソコンの動作環境は，**Windows7・Power Point2010** です。なお，発表に際して，OHPは使用できません。また，動画を使用される方は**WMV形式**でお願いします。
6. 次演者は指定の場所に着席してください。
7. 発表に関して不明な点は，編集担当の**中山正剛（seigou@nm.beppu-u.ac.jp）**までお問い合わせください。

ポスター発表者

1. 1演題につき, **発表3分, 質疑応答2分の計5分間**です。進行は座長がいたします。
2. ポスターのサイズは，原則**『A0タテ（841mm×1189mm）』**とさせていただきます。なお，掲示用のテープなどは事務局の方で準備いたします。

6. 発表プログラム

【調査報告】14:00〜14:20 <質疑応答を含む>

座長1 高橋宗良（杏林大学保健学部）

調査-1	14:00〜14:20	運動部活動実態調査
		○北徹朗（武蔵野美術大学身体運動文化研究室）

【研究報告】14:25〜15:55 <発表12分 質疑応答3分>

座長2 西脇雅人（大阪工業大学工学部）

研究-1	14:25〜14:40	大学体育における必修授業と選択授業の比較から見たライフスキル獲得の実態の検討
		○東海林祐子（慶応義塾大学総合政策学部），永野智久（慶応義塾大学総合政策学部），加藤貴昭（慶応義塾大学環境情報学部），村山光義（慶応義塾大学体育研究所），野口和行（慶応義塾大学体育研究所），村松憲（慶応義塾大学体育研究所）
研究-2	14:40〜14:55	大学体育授業の持続効果に関する研究―2年後の運動習慣と学士力関連スキルに着目して―
		○中山正剛（別府大学短期大学部），田原亮二（名桜大学人間健康学部），神野賢治（金沢星稜大学人間科学部），丸井一誠（精華女子短期大学），渡邊正和（福岡大学スポーツ科学部）
研究-3	14:55〜15:10	大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに及ぼす効果について
		○村山光義（慶応義塾大学体育研究所），村松憲（慶応義塾大学体育研究所），野口和行（慶応義塾大学体育研究所），東海林祐子（慶応義塾大学総合政策学部）

座長3 中山正剛（別府大学短期大学部）

研究-4	15:10〜15:25	大学生の体格に対する自己評価と実際の体格について
		○角田和彦（北星学園大学），星野宏司（北星学園大学），佐々木敏（北星学園大学）
研究-5	15:25〜15:40	大学体育授業時間内の歩数を効果的に増大させる方法の検討―無作為割り付け介入試験―
		○西脇雅人（大阪工業大学工学部），木内敦詞（大阪工業大学工学部），中村友浩（大阪工業大学工学部）
研究-6	15:40〜15:55	FD診断シート(個人版)による大学教養体育教員の実態調査
		○小林勝法（文教大学），木内敦詞（大阪工業大学工学部）

【事例報告】16:05〜17:50 <発表12分 質疑応答3分>

座長4 佐々木敏（北星学園大学）

事例-1	16:05〜16:20	大学体育授業におけるバスケットボールの指導―レイアップシュートの技能習得場面について―
		○益川満治（日本体育大学），園部豊（日本体育大学）
事例-2	16:20〜16:35	通信制大学における体育授業の実践と課題
		○服部由季夫（星槎大学共生科学部）
事例-3	16:35〜16:50	大学体育における合気道授業の改善には何が必要か？―受講生の自由記述による探索的検討―
		○園部豊（日本体育大学）

事例-4	16:50～17:05	スノーケリングを利用した水泳授業のプログラムと効果について―初心者から競泳部までの属性による比較検討―
		○遠矢英憲（名桜大学人間健康学部），田原亮二（名桜大学人間健康学部）

座長5　服部由季夫（星槎大学共生科学部）

事例-5	17:05～17:20	大学体育授業を通した自己への気付きを促す方法論の開発～アイスブレイクの利用～
		○飯田路佳（十文字学園女子大学），田中安理（専修大学非常勤講師），多田五月（帝京大学），清水文子（十文字学園女子大学非常勤講師），伊東泰子（日本体操研究所）
事例-6	17:20～17:35	テレマークスキーの指導に関する教材の作製
		○佐々木敏（北星学園大学），角田和彦（北星学園大学），佐藤徹（北海道教育大学岩見沢校），古市竜太（マウンテンガイドコヨーテ）
事例-7	17:35～17:50	ロシア武術システマを教材とした大学体育の授業が心身に与える影響について
		○小山陽平（茨城キリスト教大学非常勤講師）

【ポスター】18:00～18:35 ＜発表3分　質疑応答2分＞

座長6　角南良幸（福岡女学院大学人間関係学部）

ポ-1	18:00～18:05	大学ゴルフ授業における家庭学習教材開発の試み
		○橋口剛夫（帝京科学大学総合教育センター），北徹朗（武蔵野美術大学身体運動文化研究室）
ポ-2	18:05～18:10	身近な素材を利用したゴルフスイングづくりのための教材作成の提案
		○高橋宗良（杏林大学保健学部），北徹朗（武蔵野美術大学身体運動文化研究室），松林幸一郎（亜細亜大学）
ポ-3	18:10～18:15	身近な素材を利用した教具の自作と授業実践―フライングディスク授業の一例―
		○北徹朗（武蔵野美術大学身体運動文化研究室）
ポ-4	18:15～18:20	フライングディスクを用いた「キャッチビー」の紹介
		○神田亮（別府大学短期大学部）

座長7　橋口剛夫（帝京科学大学総合教育センター）

ポ-5	18:20～18:25	大学体育実技における学生の意識調査―初回授業と最終授業との比較―
		○浅井泰詞（桐蔭横浜大学非常勤講師），高野千春（平成国際大学），賎機徳彦（桐蔭横浜大学），田中幸夫（東京農工大学），村上秀明（桐蔭横浜大学）
ポ-6	18:25～18:30	大学・短期大学における障害学生に対する体育実技の現状と支援に関する取り組みについて
		○栗原浩一（筑波技術大学），及川力（筑波技術大学），天野和彦（筑波技術大学），香田泰子（筑波技術大学），中島幸則（筑波技術大学）
ポ-7	18:30～18:35	障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響～専攻学科および運動経験の関係について～
		○角南良幸（福岡女学院大学人間関係学部），鍵村昌範（健康支援研究センター），下園博信（九州共立大学スポーツ学部）

7. ワークショップ

2 日目：10:00～12:00（剣道場）

『iPad を大学体育実技で使ってみよう』

～動画の運用方法と動作の評価～

発表者：田原　亮二（名桜大学）

【プログラム】

第 1 部

大学体育授業に利用できそうな iPad アプリケーション・周辺機器の紹介[30 分]

1.　フィードバックに利用できるアプリケーションの紹介（Ubersense）

　昨年度もワークショップで取り上げ好評だった Ubersense がバージョンアップされましたので、復習も兼ねて紹介します。

2.　iPad とデジカメを繋ぐ機器の紹介（Eye-fi）

　iPad のカメラは非常に優秀ですが、デジタル(ビデオ)カメラと比較すると性能的には劣ります。ここではカメラで撮影した動画をワイヤレスで iPad に転送できる周辺機器について紹介します。

3.　iPad と PC を繋ぐアプリケーションの紹介（Photosync）

　iPad で動画撮影を多用していて直面する問題に保存容量の問題があります。iPad と PC の間で動画ファイルを円滑に移動させる方法を紹介します。

4.　質疑応答

第 2 部

iPad を使って動作を評価する[90 分]

1.　大学体育の目的と動作を評価することの関係
2.　動作を評価する手法とその手順
3.　スポーツ動作の評価をしてみよう（グループワーク）
4.　成果発表
5.　質疑応答

【お願い】

1. カメラ付きの iPad を所有している方はご持参ください（iPhone, iPod touch も可）.
2. あらかじめ「**Ubersense**」のソフトをインストールしてご参加いただけると助かります．こちらはフリーソフトとなっております.

8. ラウンドテーブル

<RT1> 教育振興基本計画に準じた大学体育の役割と仮題

企　画　者	: 丸井　一誠（精華女子短期大学），中島　寿宏（北海道工業大学）
話題提供者	: 丸井　一誠（精華女子短期大学），パク　ジョンヨン（神田外語大学）
司　会　者	: 丸井　一誠（精華女子短期大学）

【背景】

平成 25 年 6 月付に教育基本法の規定に基づき，第 2 期の教育振興計画（以下，本計画）が閣議決定された.

本計画は教育基本法の理念を踏まえ，多様性を尊重しつつ，「自立」「協働」「創造」を基軸とした生涯学習社会の構築に向けて各般の施策を推進している.

本計画の第 1 部（総論）では第 1 期計画の評価や東日本大震災の教訓を踏まえ，我が国を取り巻く危機的状況の回避に向けて「1. 社会を生き抜く力の養成」,「2. 未来への飛躍を実現する人材の養成」,「3. 学びのセーフティネットの構築」,「4. 絆づくりと活力あるコミュニティーの形成」といった，生涯の各段階を貫く教育の 4 つの基本方針を設定している.

第 2 部（各論）では PDCA サイクルが機能するよう明確な８つの成果目標と成果指針を設定し，その成果目標の実現を実施するための具体的かつ体系的な 30 の基本施策を示している.

【目的】

大学体育に関わる教員として本計画を踏まえて，運動・スポーツを通じた教育活動を行っていくことが適切であると考えられる.

本ラウンドテーブルでは，本計画に示された基本的な方向性や概要を基に，大学教育における運動・スポーツを通じた取り組みについて情報交換を行い，運動・スポーツを通じた大学教育について再考することを目的とする.

【進行方法】

①本計画の基本的な方向性や概要を確認する.

②大学期における運動・スポーツを通じた教育活動と関連する成果目標と基本施策を提示する.

③現在行われている運動・スポーツを通じた教育活動の事例を紹介する.

④グループディスカッションにて，各人が取り組んでいる運動・スポーツを通じた教育活動や位置付けについて情報交換してもらう.

⑤大学期における運動・スポーツ活動の役割や課題について総括し，運動・スポーツ活動の教育的価値，現状や課題について共有する.

【問題提起・課題検討】

①各大学の現状に応じた運動・スポーツ活動の取り組みと位置付け

②教育情報の共有化

③教育効果の明確化

④グループディスカッションにて生じた課題

<RT2> 大学体育の ICT 利用授業開発

企　画　者：北　徹朗（武蔵野美術大学），安部　久貴（東京工科大学），髙橋　宗良（杏林大学），
橋口　剛夫（帝京科学大学），田原　亮二（名桜大学），岡田　光弘（国際基督教大学），
小林　勝法（文教大学）
話題提供者：村瀬　浩二（和歌山大学），安部　久貴（東京工科大学）
司　会　者：北　徹朗（武蔵野美術大学）

モデル校に導入されている ICT ネットワーク

生徒 PC には iPad(34 台)と Android 端末(15 台)があり，体育授業では電子黒板と生徒 PC を用いていた．電子黒板は教育コンテンツ配信サービス「EduMall」（ウチダシステムソリューション）のコンテンツを学校ライセンスで購入しており，保健体育科では Edumall 内の「器械運動」などのコンテンツを使用していた．

授業での ICT の活用事例

まず初めに，中学校における器械運動の授業を例に個人スポーツ種目における ICT の活用法について説明する．器械運動の授業では，電子黒板を用いて Edumall 内のコンテンツを例示することによって課題提示をする一方で，iPad を使用して自分の技の省察および生徒同士の協働学習を行っていた．

この授業の最後には各自ができる技を組み合わせて連続技の発表をする時間が設けられており，発表に向けて生徒達は自分の演技を練習していたが，その際自分が挑戦したい技を Edumall の動画から選択し iPad で視聴していた．また，グループ内の生徒同士で互いの演技を撮影し合い，撮影した演技と参考にした動画の動きと見比べることで自身の演技の長所や短所を確認していた．加えて，iPad を用いてグループ内の生徒同士の演技を撮影する過程において，互いの演技を観察する時間ができたことから，演技に対する討議が発生し生徒間での協働学習を促進する効果もあった．さらに，生徒自身で自分の動きを確認できることから「先生，見て見て！」といった生徒からの声が減り，巡視や生徒の補助など教師の授業マネジメントを充実させる効果もあった．

続いて，中学校におけるバレーボールの授業を基に集団スポーツ種目における ICT 活用法について例示する．バレーボールの授業においても器械運動同様に，電子黒板を用いた課題例示と iPad を使用してグループでの技術・戦術の省察が行われていた．バレーボール授業の特徴的な iPad 使用方法は，試合中の映像を撮影する際に撮影者に気づいた点をコメントさせていた点である．こうすることによって，生徒同士での省察時における客観的視点の提示が可能になっただけでなく，教員が各生徒の戦術理解度を推定することが可能になった．

以上，簡単にではあるが義務教育機関における ICT 利用を例示した．ラウンドテーブル当日はこの内容について詳細に説明し，それを踏まえて参加者の各所属大学で行われている体育の授業にどのように ICT を取り入れることができるかについて意見交換をしていきたい．

<RT3> オリンピック・パラリンピックと大学体育

企画者・司会者	: 師岡　文男（上智大学）
話 題 提 供 者	: 真田　久（筑波大学），嵯峨　寿（筑波大学）
指 定 発 言 者	: 舛本　直文（首都大学東京）

2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定した．これから開催まで 6 年と 5 カ月間，学生が否応なく強い影響を受け，また終了後も一生覚えているであろうこのメガイベントを前に我々大学体育人は，どのように体育教育の中で扱い，またどのように研究していけば良いのか，永年オリンピック教育の研究・実践を続けてこられたオリンピック・アカデミー理事の真田久先生と嵯峨寿先生（共に筑波大学）に事例を基に提言をいただき，世界のオリンピック教育と研究に精通しておられる舛本直文先生（首都大学東京）に海外事例を紹介いただいた後，参加者の皆さんと共にブレーンストーミングを行ないます.

【話題提供者：真田　久（筑波大学）】

2020 東京オリンピック・パラリンピック招致では，全国 86 大学が東京都および東京オリンピック・パラリンピック招致委員会と連携協定を結び，各大学で講演会，シンポジウム，オリンピアンやパラリンピアンを招いてのトークショーなどが行われた．86 もの大学がオリンピック・ムーブメントに積極的に関わったのは始めてであり，この流れを拡大していくことは，オリンピック・ムーブメントにとって極めて重要であると考えられる.

来年の 2014 年，中国の南京にてユース・オリンピックゲームスが開催され，2018 年に韓国の平昌，そして 2020 年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催され，東アジアでのオリンピック開催が続く．オリンピック・ムーブメントそのものも時代とともにイノベーションされていて，国際開発としてのオリンピック・ムーブメントはもはや主要な要素の 1 つとして位置付けられている．そのような折，東アジアおよび日本から発信できるオリンピック・ムーブメントを各大学が模索しながら社会へ発信していくことは，大学の重要な使命ではないかと思う.

【話題提供者：嵯峨　寿（筑波大学）】

2003 年より全学学生を対象に「オリンピック」に関わる講義中心のオムニバス授業を始めた．「総合科目」と称される必修選択の教養教育である．11 年分のシラバスを紹介し，授業計画立案や評価といった授業運営に関わる実状を中心に，開講の動機・理念，これまでの足跡，手応えなどを報告する.

また，五輪開催による恩恵は東京に限らず全国に広まるようにしたい．私たち大学体育関係者は今度の五輪を機に，いかなるレガシーを標榜したらよいだろうか．個人的には，2019 年に日本で開催されるラグビーW杯を視野に，双方の価値を活かした相乗効果の実現に期待したい．オリンピズムに通ずるラグビーの「ノーサイドの精神」は，試合後における対戦チームどうしの交流会「アフターマッチファンクション」となって，また，そのための「クラブハウス」のような社交空間となって表われている．前回の東京五輪以後，運動人口，運動場は増えたが，地域のスポーツライフにおけるアフタースポーツ，プレスポーツを彩る文化と環境は育ってきただろうか．交流文化・社交環境の形成につながる体育授業とは大学でどう展開できるものだろうか．ノーサイドの精神とオリンピズムが，教養の理念やコミュニティスポーツに革新をもたらす可能性があるとすれば，W杯と五輪の日本開催は，大学体育関係者が大学改革と地域活性化に大きく貢献するチャンスになるだろう.

<RT4> 教員のキャリア開発プログラム体験ワークショップ

企　画　者：奈良　雅之（目白大学）
話題提供者：奈良　雅之（目白大学）
司　会　者：奈良　雅之（目白大学）

1. はじめに

大学教員が研修等によりその資質・能力を維持・向上させることは大学教育の質保証という点で重要である．その手段としてのファカルティディベロップメント（FD）活動は，2008 年からその実施が義務化されており，その内容は，授業改善・開発を目的としたものが多く実施されている．

一般的に FD 活動は，教育改善・開発に限定してとらえられがちであるが，有本章が『大学教授職と FD』（2005 年,東信堂）において，研究，教育，社会貢献，管理運営といった業務の遂行能力の向上をねらいとする研修活動についても FD 活動に含まれるという，広義の FD 概念を提唱してから，授業改善・開発の範囲を超えた，幅広い専門的・汎用的能力の育成・向上が取り扱われるようになってきた．しかしながら，現時点では，職階とともに変化する大学体育教員の業務全般に対する研修機会はきわめて少ない．

FD 活動は，大学の質を保証するための取り組みであるといえるが，教員個人の視点からみたとき，その能力開発･向上は，大学教員にとってのキャリア形成ととらえなおすことができると考えられる．

そこで本企画では，大学体育教員のキャリア形成に必要な資質・能力を獲得向上させる研修プログラムのあり方や方法について話し合ってみたい．

2. 研修プログラムの検討

そのための題材として，図 1 のモデルを提案する．

このモデルは，広義の FD の領域（有本章，大学教授職と FD 2005,東信堂）を参考に作成した研修プログラムのモデルであり，研究，教育，社会貢献，管理運営の 4 領域の能力がスポーツ健康に関する専門性と汎用性技能（共通性）に基づく「大学体育基礎力」に支持されるという構造をもつものである．

図1　大学体育教員のための新たな研修プログラムモデル

3. 研修プログラムモデルに基づくワークの体験

さらに，ここでは，この研修プログラムモデルに位置づけられると考えるワークの一つを体験していただき，それに基づく意見交換を実施し，内容を深めてみたい．

ワークの内容は，職場等で体験した仕事上の出来事・行動に焦点を当てて省察を行うものである．このワークは，個人で実施可能であることから，定期的に実施し，結果を自己分析することが可能である．

4. 総括

以上の内容を踏まえて，大学体育教員のキャリア形成に必要な資質・能力を獲得向上させる研修プログラムのあり方や方法について討議する．

<RT5> 大学における運動部活動の課題

企　画　者：髙橋　宗良（杏林大学），小林　勝法（文教大学），北　徹朗（武蔵野美術大学），中山正剛（別府大学短期大学部）

話題提供者：野田　耕，四方田　健二（九州共立大学），髙橋　宗良（杏林大学）

司　会　者：髙橋　宗良（杏林大学）

(公社)全国大学体育連合は，スポーツ指導における体罰・暴力を根絶させ，日本国民が普くスポーツ文化を享受することを目指し，「運動部活動での指導のガイドライン」（文部科学省，2013年）を用いた共同研究を行った．共同研究のテーマは，(1)大学生の体罰や暴力に対する意識や実態を把握するための調査，(2)大学生に対して体罰・暴力問題を認識させるためのワークショップの2つのテーマである．

本研究への参加大学数，および回答者数（2013.12.19現在）は，研究テーマ(1)では，大学数は15校であり，回答者数は2700名を超えた．また研究テーマ(2)では，大学数は1校であり，参加者数は112名であった．

研究テーマ(1)の調査の結果，スポーツ経験を有する学生の半数程度は体罰を受けたことのある学生であった．また体罰は法で禁じられているものの，時と場合によっては必要であるとする学生が存在していた．しかしながら，体罰を一部容認していた学生が，研究テーマ(2)のワークショップを通じて体罰をしてはならない理由を理解し，体罰以外の方法によるスポーツ指導の必要性に気がついたことが示された．また，そのためには指導者（教員）と選手（学生，生徒）の間に日常からの十分なコミュニケーションをとることに加え，指導的立場にある者の言葉による伝達力の向上が必要であるとの感想が挙げられた．

以下は，本ラウンドテーブルにおける説明者である九州共立大学スポーツ学部による調査結果のまとめである．

「運動部活動等における体罰・暴力に関する調査を終えて」

九州共立大学スポーツ学部

本学でこの調査に参加した学生は，教職課程履修者計675名である．また，大学で部活動を行っている学生は6割（412名）にも上る．これはスポーツ学部という特性から，他大学と比較すると高い値である．大学までスポーツ活動に取り組んできた背景には，小・中・高の部活動時代を支えた，多くのスポーツ指導者達の存在がある．自分が受けた指導に対する感謝の気持ちが，彼らを教職へと導いていると考えられる．実際にスポーツ指導者願望をもった学生は，全体の56%であり，部活動を行っている学生とほぼ同じ割合であった．

しかし残念なことに，体罰を受けた経験のある学生は，全体の4割にも上った．時期は，中学，高校が大半を占め，運動部活動と体罰問題の根の深さを伺わせる結果であった．部活動は，競技スポーツの指導のみにとどまらず，人間教育にも及ばざるを得ないため，礼儀や規律を重視する方法のひとつとして，体罰が利用されてきた可能性がある．実際のコメントをみると，「規則をやぶったから」「禁止されていた行為があったから」という理由で体罰を受けた学生がいた．一方それ以外の理由で，体罰を受けた学生がいるのも事実であった．

ただ，指導上の体罰は不必要だと答えた学生は，半数を超えており，自身が体罰を受けていても，それをしてはいけないという認識が芽生えていることが伺える．本学の教職課程では，体罰に関する講を設けている．体罰・暴力を回避するためにはどうしたらよいか，学生，教員ともに取り組んでいきたい．

本ラウンドテーブルでは，体罰・暴力に関する共同研究の調査結果およびワークショップの結果を紹介した上で，スポーツ指導における体罰・暴力問題について掘り下げて検討する．